

氏名（本籍） ほり こし かず き 堀 越 一 希（千葉県）
学位の種類 博士（工学）
学位記番号 乙第1096号
学位授与の日付 2021年3月18日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
学位論文題目 すり鉢状漁村集落における街路のネットワーク構造
一湯河原町福浦及びリスボン旧市街アルファマ地区の事例を通して一

論文審査委員 （主査）教授 岩岡 竜夫
教授 山名 善之 教授 伊藤 香織
准教授 垣野 義典 教授 寺部慎太郎
教授 伊藤 裕久

論文内容の要旨

本論文は、首都圏に残存する漁村集落の一つである「湯河原町福浦」に関して、それと類似する規模・形態をもつ「リスボン旧市街アルファマ地区」との街路のネットワーク構造の比較により、同集落の特徴とその再生へ向けた計画の一端を見出すことで、大都市近郊のすり鉢状の地形を有する小規模集落の持続的発展のための新たな視点を提示するものである。

車道や歩道、あるいは階段やスロープで構成される公共的な街路空間は、それらを取り巻く社会的環境や土地形状の変化などによって、常に時間的な変容を受けてきた。中長期的視野をもって開発された近代的都市は明治期以降、国道・県道が様々な計画理念に基づいて開発され、都市機能を持続させる試みとして一定の成果をあげてきたといえる。しかし大都市に近接する地方都市及び地方集落においては、60年代以降の都市人口の過密化と並行した地方工業化やバイパス道路建設によって、その形態の変容を余儀なくされている。

特に首都圏から最短のルートを通る海拔低位の車道開発をはじめとして、急速な近代化に迫られた大都市近郊のすり鉢状の地形を有する漁村集落においては、街路に関して大きな問題が生じている。漁村集落は沿岸部に漁港が設けられ、前面を海、背面を山という狭隘な土地に立地しており、一般的に漁港を中心として放射状に伸びる街路網が形成される。すなわち、すり鉢状の求心性のある地形と漁村集落の街路は大きな関連があり、立体的な

地形に準じて集落内には複雑な街路のネットワークが生じている。

このような地形の上に住居が密接して集合している漁村集落では、集落外部と個々の住居を接続する車両交通のための道路の敷設が困難である。多くの住居へのアクセスは歩行者専用の路地や階段などに限定され、日常生活の利便性や防災安全性を大きく損なっている現状がある。さらにそれは既存建物の改修やインフラ整備といった、集落全体の新陳代謝を阻害しているといえる。しかしながら、例えば国外に現存するすり鉢状の地形を有する漁村集落では、こうした街路の問題を克服しつつ、複雑で立体的な地形を生かした景観保全と日常の生活空間の利便性を両立している事例が多く見られる。

以上を踏まえて本研究では、首都東京近郊に残存するすり鉢状漁村集落の一事例として神奈川県足柄下郡湯河原町の福浦、及び福浦と類似する規模・形態をもつ首都リスボンに位置するアルファマ地区を研究対象として取りあげ、両地域の公共的な移動空間としての街路に着目し、それらによる街路のネットワーク構造を比較分析することで、大規模な再開発に依拠することなく、歴史的な景観保全と生活環境・交通便利性を両立させるための計画の一端を明らかにしている。

本論文は全六章で構成される。

第一章「序論」では、本研究の背景と目的、研究方法、先行研究、本論文の構成と用語の定義について述べている。特に漁村集落に関する先行研究において、街路のネットワークに着目した研究がみられないことから本研究の意義について論じている。

第二章「すり鉢状漁村集落としての湯河原町福浦」では、漁村集落の分類を通じて本研究対象である湯河原町福浦の位置づけを述べている。さらに福浦の概要と現状の問題点から、集落内の街路の構成要素と動線の関係性、及び街路のネットワークに着目することが福浦の持続性を担保するために重要であることを見出している。

第三章「湯河原町福浦における街路構造」では、首都東京に容易に接続可能でありながら準限界集落化しているすり鉢状漁村集落の事例として湯河原町福浦を取りあげる。福浦における街路の形成過程を把握したうえで、集落内の街路の構成要素と動線の関係性について分析することで、福浦の街路のネットワークが西側斜面と東側斜面で自立しており、特に東側斜面の街路に問題を抱えていることを明らかにしている。

第四章「リスボン旧市街アルファマ地区における街路のネットワーク構造」では、ポルトガルの首都リスボンにおいて震災復興の契機となった重要な漁村集落であるアルファマ地区を取り上げ、同地区における街路の形成過程を把握したうえで、集落内の街路の構成要素と動線、及び小広場の関係性を分析することで、地区内の街路がセミラチス状の街路のネットワークを有することを明らかにしている。

第五章「街路のネットワーク構造からみた湯河原町福浦」では、第三章・第四章で取りあげた福浦及びアルファマ地区について、街路の形成過程、地形の形状、街路空間、街路の構成要素の特徴と、それらによって形成される街路のネットワークの側面から比較分析することで、湯河原町福浦の持続性に向けた具体的な計画案を提示している。

第六章「結論」では、大都市近郊のすり鉢状漁村集落の持続性に向けた計画の一端として、集落内の街路のネットワーク構造を変容させることの有効性について論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、首都圏に残存する漁村集落の一つである「湯河原町福浦」に関して、それと類似する規模・形態をもつ「リスボン旧市街アルファマ地区」との街路のネットワーク構造の比較により、同集落の特徴とその再生へ向けた計画の一端を見出すことで、大都市近郊のすり鉢状の地形を有する小集落の持続的発展のための新たな視点を提示するものである。

車道や歩道、あるいは階段やスロープで構成される公共的な街路空間は、それらを取り巻く社会的環境や土地形状の変化などによって、常に時間的な変容を受けてきた。中長期的視野をもって開発された近代的都市は明治期以降、国道・県道が様々な計画理念に基づいて開発され、都市機能を持続させる試みとして一定の成果をあげてきたといえる。しかし大都市に近接する地方都市及び地方集落においては、60年代以降の都市人口の過密化と並行した地方工業化やバイパス道路建設によって、その形態の変容を余儀なくされている。

特に首都圏から最短のルートを通る海拔低位の車道開発をはじめとして、急速な近代化に迫られた大都市近郊のすり鉢状の地形を有する漁村集落においては、街路に関して大きな問題が生じている。漁村集落は沿岸部に漁港が設けられ、前面を海、背面を山という狭隘な土地に立地しており、一般的に漁港を中心として放射状に伸びる街路網が形成される。すなわち、すり鉢状の求心性のある地形と漁村集落の街路は大きな関連があり、立体的な地形に準じて集落内には複雑な街路のネットワークが生じている。

このような地形の上に住居が密接して集合している漁村集落では、集落外部と個々の住居を接続する車両交通のための道路の敷設が困難である。多くの住居へのアクセスは歩行者専用の路地や階段などに限定され、日常生活の利便性や防災安全性を大きく損なっている現状がある。さらにそれは既存建物の改修やインフラ整備といった、集落全体の新陳代謝を阻害しているといえる。しかしながら、例えば国外に現存するすり鉢状の地形を有する漁村集落では、こうした街路の問題を克服しつつ、複雑で立体的な地形を生かした景観保全と日常の生活空間の利便性を両立している事例が多く見られる。

以上を踏まえて本研究では、首都東京近郊に残存するすり鉢状漁村集落の一事例として神奈川県足柄下郡湯河原町の福浦、及び福浦と類似する規模・形態をもつ首都リスボンに位置するアルファマ地区を研究対象として取りあげ、両地域の公共的な移動空間としての街路に着目し、それらによる動線のネットワーク構造を比較分析することで、大規模な再開発に依拠することなく、歴史的な景観保全と生活環境・交通利便性を両立させるための計画の一端を明らかにしている。

本論文は全六章で構成される。

第一章「序論」では、本研究の背景と目的、研究方法、先行研究、本論文の構成と用語の定義について述べている。特に漁村集落に関する先行研究において、街路のネットワークに着目した研究がみられないことから本研究の意義について論じている。

第二章「すり鉢状漁村集落としての湯河原町福浦」では、漁村集落の分類を通じて本研究対象である湯河原町福浦の位置づけを述べている。さらに福浦の概要と現状の問題点から、集落内の街路の構成要素と動線の関係性、及び街路のネットワークに着目することが福浦の持続性を担保するために重要であることを見出している。

第三章「湯河原町福浦における街路構造」では、首都東京に容易に接続可能でありながら準限界集落化しているすり鉢状漁村集落の事例として湯河原町福浦を取りあげる。福浦における街路の形成過程を把握したうえで、集落内の街路の構成要素と動線の関係性について分析することで、福浦の街路のネットワークが西側斜面と東側斜面で自立しており、特に東側斜面の街路に問題を抱えていることを明らかにしている。

第四章「リスボン旧市街アルファマ地区における街路のネットワーク構造」では、ポルトガルの首都リスボンにおいて震災復興の契機となった重要な漁村集落であるアルファマ地区を取り上げ、同地区における街路の形成過程を把握したうえで、集落内の街路の構成要素と動線、及び小広場の関係性を分析することで、地区内の街路がセミラチス状の街路のネットワークを有することを明らかにしている。

第五章「街路のネットワーク構造からみた湯河原町福浦」では、第三章・第四章で取りあげた福浦及びアルファマ地区について、街路の形成過程、地形の形状、街路空間、街路の構成要素の特徴と、それらによって形成される街路のネットワークの側面から比較分析することで、湯河原町福浦の持続性に向けた具体的な計画案を提示している。

第六章「結論」では、大都市近郊のすり鉢状漁村集落の持続性に向けた計画の一端として、集落内の街路のネットワーク構造を変容させることの有効性について論じている。

以上本論文は、研究理論の仮説的構築と現地調査を基礎資料とする綿密な分析・検証による、建築学における建築意匠論の新たな視座を築く論文として位置づけることができる。多分野にわたる論文内容を審査するため、理工学研究科、工学研究科の各専門の審査員6名で委員会を組織し、計3回の本審査会を通して、厳密な審査を行った結果、本論文は博士（工学）の学位論文として十分価値あるものと認められた。